学　校　だ　よ　り
令和6年12月16日
ときめきにあふれ、個性が光り合う、あったかい学校づくり
NO. 37

「ありがとう、おじさん」

本校では、「道徳の日」を2ヵ月に一度設定しています。そして、毎回朝の時間にリモートを活用し、道徳担当教員からの話題提供によって全校生一人一人が自分自身を見つめ考える時間を設定しています。12月10日（火）は、今年「小さな親切作文コンクール」で香川県知事賞に輝いた岡さんの作文を取り上げ、岡さん自身に読んでもらいました。おじさんとの何気ない出会いから始まった親切に対する思いが綴られた、とても素晴らしい作文です。親切のバトンがつながる社会をつくるのは、もちろん私たちですよね。

「ありがとう、おじさん」　　観音寺市立大野原中学校　一年　岡　咲穂

私は初めて乗った飛行機に、そわそわしていた。家族四人で出かけた北海道旅行。飛行機の中は、夏休みということもあり、旅行客や仕事に向かう人たちでごった返していた。私たち家族の座席はバラバラで、横並びに二席、離れたところに一席ずつという配置だった。家族で相談した結果、私と妹が一緒に座り、父と母は離れたところに座ることになった。今まで乗り物に乗ったときは、父や母が近くにいてくれた。何か困ったことがあれば、すぐに頼ることができた。しかし、今回は違う。私と妹だけだ。私は少し不安だった。小学生の妹は、母がいないと寂しがる。それを上手くなだめることができるのだろうか。そんなことを考えていると、母が様子を見に来てくれた。

「大丈夫。何かあったら言うんやで。」

そう言い残して、自分の席に戻ろうとしたとき、隣の席に座っていたおじさんが、

「席を代わりましょうか。」

と声をかけてくれた。あまりにも突然な言葉に驚いた。母も少し戸惑ったようで、

「いえいえ、大丈夫です。ご親切にありがとうございます。」

と返した。しかし、その方は、

「お子さんだけだと、不安でしょう。ぼくは一人なので、どこに座っても大丈夫です。どうぞ。」

と、丁寧な口調で勧めてくれた。私は内心、母が横に座ってくれるとうれしいと思いつつ、その場の様子を見守った。その方は、座席チケットを差し出し、母と交換してくれた。

「全然知らん人なのに、親切やな。」

母が言った。私も同感だった。あのおじさんのおかげで、私の不安は一度に吹き飛んだ。あのおじさんは、私にとっての恩人だ。

何食わぬ顔で、席を譲ってくれたおじさんは、今どこに座っているのだろう。その後も気になった。私は、少しでもお礼がしたいと思い、母に相談した。そこで、持っていたみかんを届けることにした。おじさんは、にっこりほほえんでみかんを受け取ってくれた。何だか温かい気持ちになった。おじさんの、何気ない優しさがとてもかっこよく感じた。

見ず知らずの人への親切は難しい。知らぬ顔で関わらなければ、その場をやり過ごすことはできる。ましてや、一時間ちょっとのフライト。知らぬ顔もできたはず。でも、あのおじさんは、私たちのことを考えて、わざわざ譲ってくれた。というよりも、自然に譲ってくれた。私は、当たり前のように相手のことを慮れる、そんな人間になりたいと思った。

親切とは、自分の損得勘定にかかわらず、相手の状況や気持ちに寄り添い、そっと力になることだと思う。そんな親切の輪が広がっていくように、私も勇気を出して行動したい。そして、おじさんから受けた親切をいつかどこかで誰かに返したいと思う。親切のバトンがつながりますように。

ありがとう、おじさん。